

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 朱 琳

論 文 題 目

現代語「ばかり」の諸用法 —用法分化と用例分布の特徴—

論文審査担当者

主査 名古屋大学准教授 宮地朝子

委員 名古屋大学教授 釘貫 亨

委員 名古屋大学教授 齋藤文俊

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、現代日本語の助詞「ばかり」の多様な意味用法について、認知主義的アプローチに基づいた先行論の提案を援用して統一的な説明を試みるとともに、用法分化の条件と連続性を明らかにしようとするものである。

本論第一章では、先行各説を整理するとともに、「雨ばかり降る」のような限定（とりたて）用法と、「日本に来たばかりだ」のような直後を表すアスペクト的用法に対して部分的に提案されていた「スキヤニング探索／走査」という認知主義的な仮説に注目する。論者は「探索」および「スキヤニング」が、人間の多様な言語表現に深く関わる認知操作であることを重視し、「ばかり」の限定用法やアスペクト的用法が、程度用法や数量用法など他の用法とも解釈の曖昧性が存することを根拠として、「ばかり」のすべての用法への適用可能性を認め「スキヤニング考察」として再設定する。

第二章から第四章では、「ばかり」の上接語句を品詞ごとにわけ、第一章の見通しの適用可能性を確認するとともに、先行論の認知主義的アプローチを援用するにあたり、スキヤニング考察の前提となる「領域」や「課題」の設定条件について用例に基づいて考察、精密化を図る。第二章では、まず「名詞（句）＋ばかり」として、名詞に加え、数量表現、指示詞、形容詞語幹＋サ・ミの構成する句に後接する「ばかり」について、格、述語、従属節述語、名詞修飾といった形態統語的環境に応じて分類し、用法の現れを観察する。その結果、個物を表す名詞句に後接する場合、上接語句が複数回のスキヤニング考察の帰結となるとして「複数性明示用法」を立てるほか、主に「数量表現＋ばかり」が名詞修飾構造の「ばかりの＋名詞」句に偏在し、被修飾名詞の数量属性を表すとして「数量指示用法」となるとする。

第三章では同様に「動詞句＋ばかり」の用例を観察する。上接語句としての動詞句は、時間軸上に並んだ事態を示し、それぞれ完了／未完了においてスキヤニング考察した結果、ル形では上接語句の事態が唯一「未完了」、タ形では唯一「完了」であることを表示するとし、これらを「時間関係明示用法」とする。一方、動詞がテイル形の場合、必ず「複数性明示用法」となることも指摘するとともに、「光るばかりの美しい方」のように、名詞修飾句を構成する場合を中心として上接動詞句が程度の一様相を示す場合に「高程度指示用法」となるとする。

第四章では「形容詞・形容動詞／副詞＋ばかり」を考察し、形容詞・形容動詞への後接例がごく少なく「高程度指示用法」に、副詞は名詞・動詞に次いで用例が多い一方「わずか」「少し」など量の副詞に偏って「数量指示用法」を示すことを見いだす。「ばかりでなく」「ばかりか」のように否定や「か」との共起という統語的条件においては、名詞句・動詞句に後接する場合と同様、強く「複数性明示用法」に偏るとする。

第五章では、ここまでの考察を踏まえ、用法間の連続性と分布の偏り、分化の条件について整理し、今後の課題として日本語教育への応用と史的研究への展望を述べる。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、現代日本語で多様な意味用法を持つ助詞「ばかり」について、共時的に観察されるすべての用法を網羅しつつ、統一的な説明を目指した論考である。現代語の助詞研究は、理論的立場の多様化と課題の分化を受けて一形態についてもその意味用法ごとに独立に追究される傾向にある。それぞれの立場の説明が精密化される一方、「ばかり」のような多機能語においては、知見が離散的になりやすい。これに対して論者は、日本語学習者の一人としての自然な要請に発して、統一的な説明をめざした。一形態の多機能に合理的な説明を与えるという点で、言語学的にも目指されるべき一つの説得的なあり方といえる。「ばかり」の一部の用法に対して提案された「スキニング」という認知主義的な仮説が、諸用法にも一貫して援用可能であるという着想は論者独自のものであり、コーパスから網羅的に得た用例に基づいて検証を試みた点もその実証性において評価できる。

演繹的かつすぐれて簡潔な筆致は、立論の論理性の高さのあらわれであり、本論文の評価点の一つである。また、実際の用例の精査により、独自の枠組みに基づいて用法を整理して新たな規定を与えた点、注目すべき分布の偏りや、意味用法の発現の統語的条件を明らかにした点においても大きな成果が認められる。優れた着想から多機能語「ばかり」の様相を整理し、統一的な説明を与えるというその企図にかなった到達を示すものである。

一方、「ばかり」の意味的側面の根幹に据えられた、スキニングという認知操作の位置づけについては、本論の立論の要点であるものの、説明を要する点もなしとしない。多様な理論的立場のうち、認知主義的アプローチを採り、さらに用法全体に援用可能であるとする論拠については、先行説の検討の中でより懇切に論じる余地もある。「だけ」「まで」など同類の多機能語や副詞の類にも「スキニング考察」を認める記述は、直観的な洞察に大きく依拠しており、「ばかり」について提案した仮説を説明なく適用するあり方と受け取られれば説得力を減じる恐れも否めない。

しかし、仮説の適用可能性については、具体的な用例の検討に基づいて論じられ、条件の精密化が検討されている。その一般化において、やや画一的に、その他の例についても矛盾がないという論じ方に留まっている点は惜しまれるものの、簡潔明解な筆致と表裏をなす側面でもあり、今後の研究において十分に補われうる。共時的な多機能の相互関係を考察する本論文で実証的に把握された分布の現象面は、今後の課題とした歴史的な文法変化の過程の考察にも具体的な示唆を与える。論者が「スキニング考察」として把握提示した「ばかり」の特質は、自ずとその語彙の意味との関わりからの再検討も期待され、伝統的な副助詞研究の成果と現代語文法論の理論的考察との接続にも貢献しうるものである。以上より、審査委員一同は一致して、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと判定した。